

氏名	藤田 亮子		
学位の種類	博士(言語学)		
学位記番号	博 甲 第 7516 号		
学位授与年月日	平成 27年 7月 24日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	人文社会科学研究科		
学位論文題目	The Effect of Using Films as Teaching Materials on Japanese EFL Learners' Listening Comprehension Abilities (英語教材としての映画の使用が日本人 EFL 学習者のリスニング理解能力に与える影響)		
主査	筑波大学 教授	Ed.D. (教育学)	平井 明代
副査	筑波大学 教授		磐崎 弘貞
副査	筑波大学 教授		久保田 章
副査	広島国際大学看護学部看護学科 教授	博士(学術)	角山 照彦

論文の要旨

本論文は、英語教材としての映画の使用が日本人 EFL 学習者のリスニング理解能力に与える影響について検証したものである。様々なオーセンティック英語の中でも映画は魅力的な言語素材であるが、英語教材としての映画の使用に関する研究は少ない。そこで本研究では、映画が学習者のリスニング能力に与える影響を次の3つの研究を通して詳細に検証している。

研究1では映画と教材の言語的特徴を比較して、学習者の映画理解を困難にさせる要因を探る。映画と教材から各5種類のマテリアルを選定し、発話速度、読み易さ、語彙レベルを比較分析した。その結果、対話中のポーズは映画のほうが長かったが、映画の発話速度は教材よりも速かった。しかし、映画と教材間で読み易さと語彙レベルに違いは見られなかった。また、映画では発話中にみられる様々なバックグラウンドノイズが理解を難しくしていることが確認された。その他の特徴として、映画では、高頻度語の組み合わせによるフレーズや学習者に馴染みがない固有名詞の使用も見られた。これらの結果から、映画と教材の言語的特徴の主な違いは、発話速度とバックグラウンドノイズにあることがわかった。

研究1より、映画と教材英語の間に、バックグラウンドノイズと発話速度に主な違いが見られたため、研究2では、そのどちらがより学習者のリスニング理解に影響を与えるかを検証する。バックグラウンドノイズがある条件とない条件、発話速度が速い条件と遅い条件を、それぞれ映画音声と教材音声で比較した。その結果、ノイズの影響に関して、映画で遅い速度の条件を除くすべての条件で、ノイズがあることでリスニング理解が低下した。また発話速度の影響は、ノイズがある場合により大きかった。映画では、「ノイズなし・遅い」という難易度の低い条件でさえリスニング理解が困難な結果であったため、ノイズが付加されても、理解度に有意差が見られなかったと考えられる。次に、発話速度の影響は、全般的にノイズの影響の結果と類似した結果であった。映画でノイズがある条件を除くすべての条件において、速い発話速度でリスニング理解が低下した。さらに、マテリアルの種類や背景知識の違いも、発話速度がリスニング理解に与える影響に関係することが示

唆された。本研究の結果から、発話速度が速い状況で、バックグラウンドノイズの影響はより強いことも示された。また、マテリアルの種類はリスニング理解に影響を与え、全ての条件において教材の得点は映画の得点よりも有意に高かった。教材と映画の語彙レベルは同じレベルであったため、文脈情報やトピックの認識し易さがリスニング理解に影響を与えたと考えられる。ノイズと速い速度の両条件がリスニング理解に最も影響を与えるという結果は先行研究と一致したが、質問紙の結果からは、学習者はノイズよりも発話速度の速さがリスニング理解に影響を与えたと感じていることが分かった。

研究 3 は 3A と 3B の 2 つの長期的実験から構成されている。研究 3A で学習者の英語熟達度に焦点を当て、研究 3B で教材群との比較から映画が学習者のリスニング理解に与える影響を検証している。

研究 3A では、映画を使用したリスニング活動において、学習者のリスニング理解に与える影響は学習者の熟達度によって異なるか、また、学習者が困難に感じる点は何かを検証した。結果、ディクテーションテストで、映画と教材の両方のテストで事前・事後で有意に伸びがみられたため、両熟達度の学習者は映画と教材の音声認識能力を向上させたことが分かった。しかし、リスニング理解度テストに関しては映画と教材のテストで伸びがみられなかった。映画のリスニング理解を困難にする要因として、短音節語と音のつながりを含む語が両熟達度の学生が困難に感じる点で、特に下位群はコロケーションと文法知識などを必要とする単語の正答率が低かった。

研究 3B においては、映画を教材として使用したリスニング指導と、学習用教材を使用したリスニング指導を比較することで、映画英語教材が、学習者のリスニング理解能力に与える影響を検証した。その結果、事前事後に行ったリスニングテストに関して、映画の内容理解テストでは両群で有意に向上がみられたが、ディクテーションテストでは有意な伸びは見られなかった。映画ディクテーションテストに関しては、映画群の平均値は上昇したものの有意な向上はみられなかった。教材内容理解度テストも、映画群の向上は有意傾向にとどまった。しかし、質問紙の結果から、両群の学習者は自身のリスニング力は向上したと感じていることが明らかになった。ディクテーションワークシートとジャーナルの分析から、学習者が難しいと感じている点は、特に映画群では「つながり語」と「発話速度の速さ」であった。一方、教材群の方は「難易度の高い語彙」を理解することで、また、リスニング音声の細かい点に注意を向けていた。

以上の結果を踏まえて、バックグラウンドノイズがある音声と発話速度が速い音声に学習者が慣れる必要性があり、この部分の指導が今後の課題である。また、映画は動機付けに良い影響を与え、熟達度の低い学習者でもリスニング教材として効果的に使用できることが示唆された。

審 査 の 要 旨

1 批評

本論文は、英語教材としての映画の使用が日本人 EFL 学習者のリスニング理解能力に与える影響について検証しており、評価されるべき点は次の通りである。(1) 映画の活用がリスニング指導にどの程度効果があるのかについては、実証研究が不足している中で、学習者の熟達度と教材群との比較に焦点を当て多角的に検証している(研究 3)。(2) 映画と教材マテリアルの言語的特徴の違いを検証し、先行研究では明らかにされていない映画特有の音声面の特徴である、発話速度の速さとバックグラウンドノイズとポーズの長さについて検証している(研究 1)。(3) 映画の特徴であるノイズと発話速度のどちらの要因がよりリスニング理解に影響を与えるかを検証している(研究 2)。(4) 量的分析だけに頼らず、ジャーナルやアンケート調査などを用いて質的にも分析し、映画のリスニング理解への影響を検証している。

急速なグローバル化が進む中、日本の英語教育においても、学習者のコミュニケーション能力の育成が重要

視されている。その中で、英語教材としての映画の使用は、学習者と教師にとって魅力的な教材である。学習者の動機づけへの効果を検証する先行研究が多い中、英語学習素材としての映画が、学習用教材とどのように異なるかを明らかにすることは大変意義がある研究である。さらに、先行研究では明らかにされていなかった教材群との比較で映画がリスニング力へ与える影響を明らかにしたことは貴重な研究成果である。また、映画の特徴である発話速度の速さとノイズの要因を比較するための実験を行い、両要因が重なるとリスニング理解度に大きな影響を与えることがわかったことは、新しい知見と言える。さらに、教材群と映画群に対して長期のリスニング指導を行い、映画群のほうがよりリスニング力の向上を感じていたという点は、映画を積極的に英語指導へ取り入れることに対する示唆となる。

本論文の改善点として次の点が挙げられる。第1点目は、映画を英語教材として使用できるかという点を映画の短所と長所の両サイドからもう少し広くかつ深く議論するべきであったと思われる。そうすることによって、より研究者としてニュートラルな知見が得られたと思われる。第2点は、研究1の分析対象データが教材と映画から各5種類ずつで、それぞれ1分ほどの短いスピーチデータであったことである。これらの調査対象のデータが短かったため、発話速度、語彙レベル、スクリプトの読み易さなど、言語的特徴を詳細に分析することができ、博士論文として単独で吟味するには十分可能であった。しかし、今後は分析協力者と協力してより大きなデータを分析対象とすることで、映画の言語的特徴に関してより信頼性のある検証を行うことが可能となるだろう。第3点目は、研究2でノイズと発話速度の影響を調査するため、合成音声ソフトを使って教材と映画の音声を編集した点である。合成音声を用いることで、余分な要因を取り除き、検証対象であるノイズと発話速度の要因のみ検証していることは理解できるが、合成音声を用いることで映画のオーセンティシティーが失われてしまったことは考慮すべきである。映画のバックグラウンド音が必ずしもネガティブに働くわけではないため、ノイズ除去や速度調整、また適切な分析場面の選定などの方法で、映画のオーセンティシティーを失わずに教材と比較することを、今後模索していくことが望まれる。最後に、研究3の映画を使用したリスニング能力への影響に関して、長期にわたって検証したことは評価に値するが、リスニング能力の検証方法がディクテーションテストと多肢選択問題の理解度テストのみであった。それ以外の方法で検証することで、異なる観点から映画の効果を検証できたのではないかと思われる。

上記のような改善点はみられるものの、本論文は英語教材としての映画の使用が日本人学習者のリスニング理解能力に与える影響を、長期的実験、教材音声との比較、映画の聴解困難な要因の検証、と多角的に調査した貴重な研究結果である。今後、映画というオーセンティック教材が日本の英語教育の指導において使用されるにあたり、どのような影響を与えるかについて大いに寄与される内容で、示唆に富み、高く評価することができる。

2 最終試験

平成27年5月15日、人文社会科学研究科学学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

3 結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。